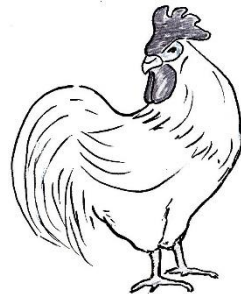


## 村井弦斎、平塚に家を買う

—明治時代—



「多嘉子、ここから見る富士山はすばらしいだろう」

「ええ、とてもきれい。大磯や小田原からではこのように見えませんものね」

村井弦斎と妻の多嘉子は、一軒の古い家の前で肩を寄せ合うように立っていました。耳をすますと遠くからかすかに海の波音が聞こえてきます。

「この家を建て替えたなら、富士を望む家、対岳楼たいがくろうと名付けよう」



「ところでお庭はどれくらいあるんですか」

弦齋は、指をのばして遠くをさししめし、ぐるりと回しました。

「まあ、そんなに。米子<sup>よねこ</sup>たちが遊ぶ<sup>あそぶ</sup>には広すぎやしませんか」

「ここには、畑<sup>かじゆえん</sup>や果樹園<sup>くだわたり</sup>を作<sup>つく</sup>って、鶏<sup>にわとり</sup>やヤギなども飼<sup>か</sup>うんだ。私はここを食育<sup>しょくいく</sup>の実験場にするつもりだよ」

弦齋は、このとき報知新聞<sup>ほうちしんぶん</sup>の記者であり、小説を書く作家でもありました。

明治三十六年（一九〇三）に書いて出版し

た『シヤクヤク食道楽』がベストセラーになりました。この小説は、一応、恋愛ストーリーなのですが、食に関する話が満載で、登場するレシピも多彩たさいです。

ヒロインのお登和とわは、美人で料理上手、食に関する知識も豊富です。このお登和のモデルが、弦斎の妻、多嘉子でした。

『食道楽』の大ヒットでお金もできた弦斎は、翌年、平塚に広大な土地を買い、ここに住むことにしたのです。

数年後、夏の暑い日。

ある雑誌記者が知人と連れ立って弦斎を訪ねました。

平塚停車場ていしやばでおりて、踏切ふみきりを渡ると南に向います。しばらく歩いたところに弦斎邸ていはありました。松の木々の間から広い畑が見え、その中に建つ家は島のようにでした。

「ようこそお出でくださいました」

弦齋は、笑顔で迎え、先まずはと冷たい飲み物を出しました。

「のどがかわいたでしょう。これは麦コーヒーというものです。体にいいですよ」

弦齋は先に立って屋敷を案内します。

畑には、トマト、キャベツ、カボチャ、ナス、瓜うり類がたくさんなっていて、水蜜桃すいみつとうや桃ももの実もたわわになっていました。

「次は、鳥獸園ちゆうじゆつえんです」

低い垣根かきねの中には、鶏のひなが何百羽といて、ウサギの姿もあります。そこへヤギ三頭が弦齋を見つけて近寄って来ると、その間を二頭の犬もじゃれ回りながらついてきます。

「牛はいないのですが、豚は近々飼おうと思っています」

「さすがですね。食料はほとんどこの屋敷の中で間に合ってしまうんですね」

「あとは魚ぐらいですが、近くに漁港があるので、たいがいはそこで手に入ります」

外を案内して家に戻ってくると、子供たちが出迎えました。

「いらつしやいませ」

長女の米子が先に立ってあいさつをすると、それにならって妹や弟たちもおじぎをします。

「お食事の用意ができていますよ」

そう言つて、多嘉子は奥へ案内しました。初めに出てきたのは、アジのすり身と白髪しら昆布こんぶのすまし汁です。次に、パンとフランスバター。馬入川ばにゅうがわの鮎あゆフェタス、鳥のフルカセー（鳥肉をバターで炒いためて、白ソースで煮にたもの）と料理は続き、デザートとウーロン茶を含め全部で一〇品が出されました。

「これ全部、奥さんの手料理ですか。今日は、取材に来たのか、ごちそうになりに来たのか、わかりませんね。ところで先生ご自身は、台所に立って料理もするのですか」

「私が台所に入ることはありません。料理は主に多嘉子がつくりまします。『食道楽』を書いているときは、料理人やコックなどに来てもらって作ってもらったこともありますよ」

二人は、おなかをさすりながら弦斎邸をあとにしました。

「あんなに食べたのに、お腹がぜんぜん苦しくないよ。きつと、消化のことまで考えて作られているんだね」

弦斎は、昭和二年（一九二七）、六十三歳で亡くなるまで、この地で多嘉子と一緒に食の研究を続けました。

作・画／平塚てづくり紙芝居の会 たもん丸